

北区オリジナル紙芝居「かっちゃん はなみず でた」

～制作にあたって～

■この紙芝居がめざすこと

この紙芝居は、包括的性教育（Comprehensive Sexuality Education：CSE）の考え方をもとに、3～6 歳の子どもたちに「自分の体を大切にしてい」いう感覚を育むことを目的に制作されました。テーマは【境界線と同意】です。

多くの人にとって「性教育」と聞くと、性行為や避妊など、性の知識だけにとどまる内容を想像する方も多いかもしれません。

しかし、世界の教育現場では今、性教育＝人権教育という考え方が主流になっています。この紙芝居は、日本でもそのスタンダードを幼児期から始めるための第一歩です。

■なぜ幼児期に「境界線と同意」を学ぶのか

子どもには、生まれながらにして「からだの自己決定権：Bodily Autonomy」があります。

それは、自分のからだに何をしたいか、してほしくないかを、自分で決めていいということです。これは、子どもの権利です。にもかかわらず、日常の中では、「勝手に体を触られる」「嫌と言っても無視される」「“してあげてるんだから”と不快なふれあいを我慢させられる」など、気づかないうちに子どもの気持ちを後回しにしてしまうことが起こります。

この紙芝居では、主人公・かっちゃんが「鼻水をふかれる」という日常の中で、勝手にふかれて嫌な気持ちになる場面、返事を待たずにふかれてモヤっとする場面、「ふいてもいい？」と聞かれ、自分の意思で「うん」と答えられた場面を通して、自分のからだに関わることには「聞く」「待つ」「同意を得る」という関わり方が大切であることを学びます。

■「良かれと思って」の中にある気づき

私たち大人は、子どもが困っていれば助けたい、快適に過ごしてほしいと願い、「鼻をふいてあげる」「服を直してあげる」「手を引いてあげる」など、日々たくさんの関わりをしています。

しかし、ときにその関わり方が、「良かれと思って」の一方通行になってしまうこともあります。子どもの気持ちを確かめる前に体に触れたり、「いや」と言われても止めなかったり——それは、愛情から出た行動であっても、相手にとっては“嫌だった”体験になることもあるのです。

この紙芝居は、そうした「当たり前」に、少しだけ立ち止まってみるきっかけになります。

「知らなかっただけ」、「言われてみれば、自分もそんなふうにされてきたかも」——それに気づけることこそ、次の一歩です。ここで「間違っていた」と反省するだけで終わらせず、“これからは、子どもの気持ちをもっと聞いてみよう”とする姿勢が求められます。

■大人の関わりが、子どもの人権感覚を育てる

私たち大人は、ときに“良かれと思って”お世話をしたり、“早く終わらせたい”という気持ちで先回りしてしまったりすることがあります。また、現場によっては、子ども一人ひとりの声よりも、「園のルール」や「全体の流れ」を優先せざるをえない状況があることも現実です。しかし、子どもにも人権があります。

- ・ 「いや」と感じる気持ちにフタをしないこと
- ・ 「触れていい？」と確認してもらう経験があること
- ・ 自分の気持ちを聞いてもらえた体験を積み重ねること

これらの経験を通じて、子どもたちは「自分は大切にされる存在なんだ」、「イヤなときは“いや”と言っていいんだ」、「友だちの体も、気持ちも大事にしよう」と、自然に人権感覚と他者への思いやりを育てていきます。

■この紙芝居で育てたいこと

- ・ 「体の境界線」を尊重する感覚

嫌なことは「いや」と感じていい。自分の体に「境界線」があることに気づきます。

- ・ 「同意」の感覚

相手の体に触れるときは、同意を得るのが基本。

聞く→待つ→返事を尊重する、がポイントです。

- ・ 「感情の認識と表現」

登場人物の表情から感情を読み取り、自分の気持ちを安心して表現できるようになります。

■この積み重ねが、将来にどうつながるのか

子ども時代に「体を大切にされる」「いやと言っていい」「相手の気持ちも尊重する」という経験を積み重ねることは、思春期・青年期、そして大人になったときの“性”や“人間関係”のあり方を大きく左右します。

境界線を尊重されて育った子どもは、自分の気持ちに正直でいられることや、「嫌なときは断っていい」「納得できるまで保留にしていいい」という姿勢を持てるようになります。これは、思春期以降の性的な場面において、無理に同調せず、自分の意思で選び、自分を守れる力＝性の自己決定力に直結します。

また、周りの人の気持ちや、同意を丁寧に確認できる人間関係を築けるようになることは、恋人やパートナーとの関係だけでなく、仕事・友人・家族といったあらゆる対人関係においても、暴力や依存ではなく対等な関係を築く基盤になります。

“同意”とは性的な場面だけの話ではありません。幼児期から「自分の意思を尊重される経験」「相手の気持ちを尊重する感覚」を育むことこそが、未来の“性暴力をしない・されない”社会づくりの土台となるのです。